

赤ランプの点灯状況と露出の関係

3つの赤ランプの点灯組合せによって、指示露出が変化することは前述のとおりであるが、その点灯状況と指示露光量の関係について調べてみた。測定は、いつものとおり写真測光によって行うわけであるが、マスカン人形(18%灰色板を含むカラーチャート併置)をカラー用写真電球で照明し(照明レベルEV11)、赤ランプの点灯指示に従ってサクラカラーR100を使って撮影し、センチメートル的にその指示露光量をチェックした。

まず標準露出の指示である中央赤ランプの点灯している幅をチェックした。その結果、約1/3絞り弱相当の非常に狭い幅であり、わずかの絞り変化で赤ランプが点滅し、感度を1/3ステップで変化させても各設定感度で標準露出がチェックでき、測光精度の高いことを示している。つぎに2つの赤ランプが点灯する場合および、上・下の赤ランプが1つ点灯するときの指示露光をチェックしたところ図3のような指示露光とランプの点灯特性のあることがわかる。

色フィルターをかけたときの指示露光量

一般に、TTLカメラに色フィルターをかけて撮影すると、色によってかなり露光のパラツキが生ずることがある。これは受光体の受光感度分布、フィルムの分光感度、照明光のエネルギー分布、それにフィルターの分光透過特性の関連によって生ずるトラブルと思われるが、特に赤フィルターをかけたときに顕著に現われる。

今回、赤外感度のない受光素子(GaAsP)を用いたFMは、色フィルターをかけたときどのような特性を示すか、興味深い。そこで晴れた日、屋上にカラーチャートと人物を配し、色フィルターをかけ、そのときの指示露光で撮影してみた。図4はその結果であり、これまでの特性と同じ傾向をもっているが、そのパラツキはかなり少ないことがわかった。一連の写真は(写真5参照)、テストフィルムよりフィルターをかけないで撮影したネガの焼度でプリントし、同時に現像した結果である。

最後に、ニコンFMにカラーリバーサルフィルムをつめ、ランダムに実写してそのカラーライドを視覚的に評価した結果は、申し分ない仕上がりであった。

一方、定量的に評価するため恒例の標準被写体をアイランプ製カラー用写真電球で照明して、FMの指示露光で撮影したところ、いくぶん露光オーバーとなった。図5がその結果である。

■モータードライブMD 11

最近のコンパクト一眼レフにはかならずといってよいほどパワーウィンドーが供給されているが、このニコン



フィルターなし

B12フィルター使用



Y44フィルター使用

R60フィルター使用

写真5 各種フィルター使用による撮影プリント

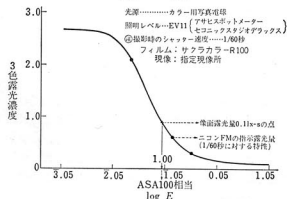


図5 指示露光特性

FMについても専用のモータードライブMD-11が用意されている。ここではワインダーとモータードライブのネーミングについての議論はおくとして、ニコンの場合もELではオートワインダーの名称を用いており、その使い分けは巻上げ速度で行っていると考えられる。すなわちELでは単3電池6本を用いて、巻上げ速度0.5秒であるのに対しFMの場合は、単3電池8本を用い連続撮影で秒間3.5コマという性能をもっている。この秒間撮影コマというのは一見実用性が低いように思われるが、これはむしろ1コマ分のフィルム巻上げスピードが早くなることによって必然的に生ずる結果であって、かならずしも設計の目標となっていないケースも多い(カタログデータ的にはにぎやかでいいが)。このFMの場合もボディ側での巻上げトルクを軽くするために、要所にベアリングを用いるなどの配慮をすることによって、巻上げスピードを上げることが可能になり、その結果秒間撮影コマ数が上がり、さらには1セット8本の電池で36枚撮りのフィルム100本の巻上げを公表しており

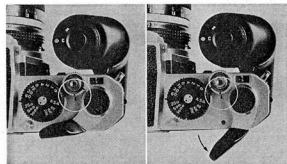


写真6 モータードライブ動作はシャッターレリーズボタン座を赤印にセットし、モータードライブ部のスイッチをONにする。なお、スイッチは露出計のLED点灯となるので使用以外はOFFにする必要がある（左はモータードライブ使用時、右は手動巻上げ時）

（ELでは6本で約40本）、電池の寿命にも大きなメリットを与え、また手動巻上げの感触も抜群の状態を持たせることに成功している。

ただ、FMとMD-11の組み合わせで注意すべきことは、①カメラのシャッターボタンリングの赤マークを指標に合わせ、②巻上げレバーを格納位置にし、③モータードライブのスイッチをONにして、④グリップのレリーズボタンでシャッターを切る、ことが必要で、このうちどれを間違えてもモータードライブは正常に作動しないことがある。もし、作動しない場合でも前述の①～④を繰返せば正常な作動状態になる。

また、モータードライブのスイッチはTTL測光のスイッチも兼用していることから、このスイッチをONにした状態でよくとLEDが点灯したままになり、ボディ内の銀電池をいたずらに消耗することになるので、十分に注意が必要である。また、モータードライブが作動中に巻上げレバーを作動しないように注意する必要がある（モータードライブを用いる場合にはレバーは引出す必要がない）。いくつかの使用上の注意を示したが、1回慣れてしまえばあたりまえになるのであまり気にする必要はなく、パシッ・パシッときまる感触はさすがニコンのモータードライブという感があり、手動巻上げのスムーズさがもっていないが、やはりFMにはモータードライブが標準装備といえよう。

■まとめ

日本光学初のコンパクト一眼レフとして登場したニコンFMについては、テストを行う前の段階から、テストの間には大いに期待する者と、なんでニコンがコンパクトカメラを出すのか、とやや否定的な考えを持つ者と、2つの考え方が存在していた。しかし、テストを終えた現在の状況は、考え方のベースとして、どうもFMは最初からかならずしもコンパクト化を第1目標にデザインされたというより、むしろ1つ1つのメカニズムのぜい肉を落してより合理化していったら結果として小型になってきたのではないかと、見ている向きが多い。

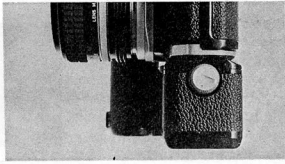


写真7 モータードライブMD-11の側面。グリップ部以外の厚さをボディと同じにまとめている。コインによって側面のネジを開けると中に単3型電池8本が収納される

その意味では比較の対称となるニコンF2系そのものが大きいカメラであり、そのコントラストとしてFMが一回わり小さく見えるが、他社との比較においてもそれほど小型という印象もないのが実感といえる。

したがって、FMを手にした感じとしては、これまでのニコン製品の持っていた重厚さや堅牢さのイメージは十分に残っており、それに加えて巻上げレバーをはじめ各部の操作性も一段と向上してきたといえる。

ただ、モータードライブなどを加えた場合の各部のセッティングの関係など、十分検討された結果ではあろうが、なにかメーカーサイドでの判断をユーザーに強いているような部分も見られ、撮影という現場での行動パターンとバランスしにくい条件もいくつか見うけられた。

また、絞り込みレバーのハーフセットでのシャッターレリーズのトラブルなど（もちろん誤操作ではあっても、意識されないで行われるケースは出てくる）、ニコンしからぬ点といえよう。

いくつか気になる点を指摘したが、ニコンFMに関する総合評価としては外的なスペック以上に内側のメカニズムに対し十分な配慮が行われ、中味の濃いカメラという印象でFMのコマーシャル“小さくなくてもニコンはニコン”をそのまま認めようというところである。

一方、“ニコンを変えずにニコンを変えた”と近頃まれにみる名コピーで登場した、ニコンFマウントのAI化に対する評価は実に多様で、全面的賛成派から完全否定派まで、ニコン党も非ニコン党もそれぞれの立場からの発言があり、現状としては収拾がつかない状態といえる。たしかにこの問題については、これからニコンを使うという人にはまったく関係がないことで、あくまでも問題は今までニコンを利用していた人々にかかわることである。本当に“ニコンは変わったのか”“ニコンは変わらなかったのか”、現時点ではわれわれにも策を述べる条件がそろっていない。この問題についてはもう少し検討の時間がほしい気がする。

〔訂正〕 5月号61ページ、フラッシュフジカデートの仕様を以下のように訂正いたします。シャッター 1/4～1/800秒。連動範囲 EV5～17。ファインダー内デートマーク、大きさ・重さ130.5×75×54mm, 380g。価格本体¥35,300（編集部）